

〈書評〉

中野裕考著

『カントの自己触発論——行為からはじまる知覚』

(東京大学出版会、2021年)

辻 麻衣子

本書は、『純粹理性批判』でカントが展開した自己触発論を手がかりにカント独自の知覚論を析出し、カントの知覚論のもつ意義を多方面から明らかにすることを試みるものである。

まず序論は、本邦の西洋哲学史研究がこれまでカント(認識論)の研究に与えてきた座についての考察から始まる。この座については、廣松渉のカント解釈、そしてそれを基盤とした彼の西洋近現代哲学理解に端的に表れているという。「全てがそこへと流れ込み、全てがそこから流れ出る」ところのカント像を掲げる廣松は、戦後の哲学が陥っている停滞を打破するにはカントに立ち返るべきなのだ、と主張した。もちろん、ここで廣松が念頭に置いている「カント」とは『判断力批判』や『人間学』のカントではなく、『純粹理性批判』のカントであり、近代認識論の典型としてのカント理論哲学である(なお、廣松のこのカント観は牧野・中島・大橋編著『カント—現代思想としての批判哲学』(情況出版、1994年)で廣松が司会を務めた三編者の鼎談でも披瀝されており、彼らのスタンスとの違いが期せずして可視化された。)。だが、このような近現代西洋哲学史観が、もはや何重もの意味で過去のものであることも事実だ。スピノザやライプニッツなどカントに先立つ哲学者についての研究は飛躍的に進んでいるし、カントを出発点として、フィヒテからシェリングを経由しヘーゲルへ、という「ドイツ観念論」の単線的な哲学史観は、前世紀末にデューター・ヘンリッヒが取り組んだ「コンステラティブ・プログラム」を皮切りに、ヴォルフやランベルト、クルージウス、テーテンスといった同時代の哲学者たちとの相互影響関係から当時の哲学的状況を捉えようとする「ドイツ古典哲学」に置き換わりつつある。もっと言えば、カント研究自体も『純粹理性批判』を頂点とする理論哲学中心主義を脱し、法哲学、政治哲学、美学、歴史哲学など、かつては周縁的とみなされていたトピックについての研究が盛り上がっている。それどころか、『純粹理性批判』研究もまた、その前半部を占める超越論的感性論と超越論的論理学「概念の分析論」を扱う認識論一辺倒ではなく、超越論的弁証論や超越論的方法論を単独で取り上げる研究が増えることで、さらに細分化されてきている。

以上のように、廣松が1975年に書き残した診断書はもはや有効期限切れだろう。では、ひるがえって廣松があくまでも核に据えようとしていたカント認識論についてはどうかと問えば、著者の見るところ、本邦の西洋哲学史研究におけるカント認識論の理解は廣松のそれで止まってしまっている。日進月歩のカント研究にあって、「三項図式」に代表される廣松が提出した理解の枠組みはいまだ更新されていないという。この点については、評者も日本の大学の哲学科で教育を受けてきた者としてまったく同意するところである。

カント認識論が相対化されながらも、その内容理解については停滞している、という状況を、著者はカントとモダニズムの問題として捉え直す。モダニズムの真髄は新しさの肯定であるが、それがカント解釈と相即している、というのだ。「カントを理解することは、カントを越えていくことである」とは新カント派のヴィンデルバントの言葉だった。彼らをはじめとしてカントに

降の哲学者は多かれ少なかれカントを越えていくことを目指しており、明治以来の日本はこうした哲学者たちの思想を輸入してきた。それゆえに、本邦の西洋哲学(史)研究はカントを乗り越えるモダニズムを半ば自明なものとして受け入れてきたのである。

もっとも、先に述べたように、このモダニズムは退潮傾向にある。こうしてカントから解放されるという現況は、哲学研究のトピックが多様化し、それぞれ発展してきた結果であって、喜ばしいことではある。だがその裏で、カント認識論だけは時代から取り残されており、著者はそこにこそ目を向けるべきであると言う。しかし、だからといってこの期に及んでモダニズムに立ち返るわけにはいかない。モダニズムとは違うスタイルを模索すべきなのだ。序論の題にある通り「乗り越える」とは別の仕方だ。カントを、それもカントの認識論を読む必要がある。

このように広範な問題意識を背景に、著者は本書の狙いを以下の二点にまとめる。まず、現代に生きる我々のそれとは大きく異なるカント独自の術語—「悟性」などはその最たるものであるだろう—や枠組みを用いて編まれたテキストを、我々にも理解可能なものへと変換し、他の術語や枠組みを用いたものと比較するための土俵に上げること。こうしてカントをカントの外に出す作業によって初めて、その黎明期以来カントにがんじがらめになってきた本邦の西洋哲学史研究が真の意味で自由になることができるのだと著者は断言する。続いて、『純粹理性批判』第二版の超越論的演繹論で初めて本格的に展開された自己触発論を中心に据え、カント認識論そのものを刷新すること。いまだスタンダードとして流布している廣松流の理解に著者は否をつきつけ、新たな演繹論理解、新たなカント知覚論解釈を試みる。

これら二つの狙いを、本書は三部11章構成で完遂する。個人的に、狙いと構成のこの組み合わせの妙に舌を巻いた。後述するように、大きな哲学的問題の検討と微に入り細を穿つテキスト研究とが複雑に織り合わされることで、著作全体に有機的なまとまりが生まれている。以下、目次を追いながら本書の内容を簡潔に紹介しよう。

まず第一部では、本書の中心的テーマである自己触発についてカント自身のテキスト(具体的には『純粹理性批判』超越論的感性論、第二版超越論的演繹論(とりわけ第24節))をきわめて綿密に分析し、そこから取り出されたカントの知覚論がアルヴァ・ノエの提唱するエナクティヴィズムに近い立場であることを示す。エナクティヴィズムは、知覚経験を「主体が自ら統御する運動に従って「エナクト」される、つまり行為に応じて現実化する」と捉えるが、カントが説く自己触発もまた「主体の行為としての運動」であり、エナクティヴィズムと同様、運動における自発性を重視するのだという。カント研究の内部を振り返れば、1960年代にフリードリヒ・カウルバッハがこうした主体の行為としての運動を「超越論的運動」として認識行為の根源に位置づけて解釈したことが知られており、本書での解釈はカウルバッハのこの解釈に影響を受けたものであると著者自ら述べている。カウルバッハの「超越論的運動」論自体は、カント認識論研究においてすでに半ば廃れた立場であるが、著者はこれを知覚の哲学という現代の議論の俎上にも十分上げられるものへと鮮やかにヴァージョン・アップさせた。続いて、このエナクティヴなカントの自己触発論がハイデガーを経由してメルロ＝ポンティ、デリダ、アンリなどフランス現象学を先取りしていることを明らかにする。一貫して『純粹理性批判』の初版を評価したハイデガーの思想を入口にカントを読んでいた彼らは、カントを論じているにもかかわらず、あまりにもカントに忠実でないと指摘されることが多いが、メルロ＝ポンティの身体性やアンリの内在性など、彼らが目を付けた概念はすでにカントの自己触発論に包含されていたのである。

続く第二部では、第一部で論じられた主体の行為としての運動が主体に対して与える知覚内容に焦点が当てられる。カント認識論研究におけるこの数十年の知覚論研究では、客観的妥当性をもつ命題的判断の成立の手前に、その判断の素材となるべき直観ないし知覚があり、自発性によってそれが分節化されているという解釈がなされてきた。そしてこの直観ないし知覚には非概念的内容が含まれるのか否かをめぐる概念主義論争において、著者はカントの立ち位置を非概念主義のハナと概念主義のマクダウエルの中道に求め、かつその可能性を「図式」に見出す。運動する主体自身の内的知覚についても、第一部での自己触発論解釈をもとに再解釈を施し、同時にここで問題となる時間と空間の超越論的観念性というテーゼを「観念論論駁」へのアタックによって検討して、カントの実在論を明らかにする。

以上の二つの部を通して、自己触発を中心としたカントの知覚論が取り出され、それは豊かな背景、広い射程をそなえたものへと成長を遂げた。こうしてリッチになった知覚論を携え、最後の第三部では再び第一部冒頭のような細かいテキスト解釈へと立ち戻る。初版の超越論的演繹論や『プロレゴメナ』の不備を指摘したのち、本丸である第二版超越論的演繹論の解釈に乗り出すのである。とりわけその証明構造の解釈については、前半部にはストローソン、後半部にはヘンリッヒという巨人が立ちはだかるなか、「主体の行為としての運動」である自己触発を軸に新たな見取り図を提示する本書の試みは、演繹論研究の最前線にも大きなインパクトをもつものだろう。

カント認識論、あるいは演繹論の研究は、ともすれば蝸壺だと揶揄される哲学史研究の代表例だと言われがちだ。だが、本書が行った試みは、蝸壺的な哲学史研究を真摯に究極まで推し進めていくと、むしろそれは時代も専門領域も超越して、きわめて普遍的な哲学的立場へと昇華されるのだ、ということをも身をもって我々に教えてくれる稀有な例である。カント認識論という狭い範囲を相手にする哲学史研究と、知覚とは一体何なのかと問う哲学研究をときに悪戦苦闘しながら行き来するその姿勢に、同じくカント(認識論)研究を志す一研究者として最大限の敬意を表したい。